

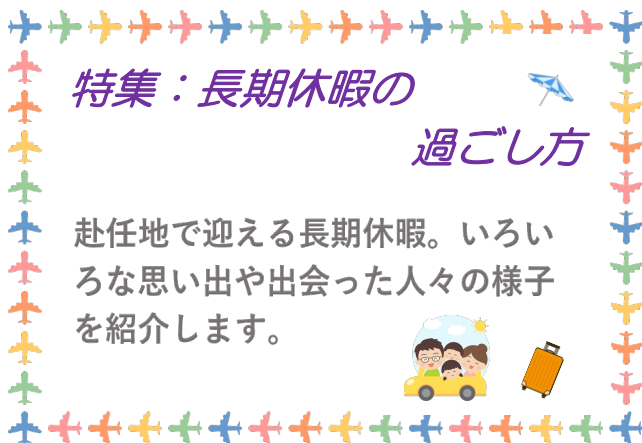

フレンズだより



がんばる帰国生シリーズ「海外生活を振り返って」より
独立戦争「ヨークタウンの戦い」記念地で突撃訓練の疑似体験をしている写真

CONTENTS.....

- P2-9 特集 世界各国の長期休暇の過ごし方
- P10-11 がんばる帰国生シリーズ
 「海外生活を振り返って」 フレンズスタッフ C.O
- P12 海外レポート 42 「海外運転事情」
- P13-15 文化理解から多文化共生へ プラニク・ヨゲンドラ
- P16 学校案内／編集後記


特集：長期休暇の過ごし方
赴任地で迎える長期休暇。いろいろな思い出や出会った人々の様子を紹介します。


世界各国の長期休暇の過ごし方

赴任地で迎える長期休暇。いろいろな思い出や人々の様子を紹介します

イラン

カスピ海リゾートと砂漠での体験

イランの学校の新年度は9月に始まり6月で修了します。子どもたちの通っていた学校の開始はほとんど10月に近い9月の終わりの時期だったので、夏休みの期間はたっぷり3か月もあります。イランは日本のような冬休みがないので現地の新年に当たる3月の春分と夏休みが長期休暇の季節です。外国に行く、子どもたちが留学に出るなど家庭によってさまざまですが、私たちは遠方への国内旅行をしたことが2度ありました。

旅の移動は2度とも、夫が毎日お世話になっていた勤務先の運転手さんによる車です。公共の乗り物を使って自力で移動していくことは困難だろうと家族全員の意見が一致して、運転手さんも私たちと一緒に旅行をしていくという珍しい機会となりました。広大なイラン国内の移動は遠くに土山、岩山を見ながら店も何も無い数百キロの道路が延々と続きます。見知らぬタクシーやバスに乗り継ぎながらではなく、安心して移動させてもらえることはたいへんありがたいものでした。



1年目はイラン北部の世界最大の塩湖、カスピ海地方へ。海にしか見えない湖の水平線の向こうには、イラン以外の4カ国が面しています。私たちが住んでいた首都のテヘランやその他の乾燥した地域に比べると湿度が高く景

色も異なり、水田や濃い緑に覆われている山々の風景を見た時は、ここは日本なのではないかと思ってしまうほどでした。湿気を含んだ湖の風と暖かな空気はたいへん心地よく、イラン人にも人気のリゾート地です。湖の浜には自由に遊べる小さなプールがありましたがイランのルールの下、外から見えないよう高さのある囲いに覆われており男女別々に作られています。女性の水着はダイビングスーツのように全身の肌を露出しない形で腰回りもスカートのようなものが付いており、さらに髪も水着素材でできたスカーフで覆います。全身を隠すこのイスラムスタイル、日本で着ていたら目立つこと間違いなしです。



2年目に行ったヤズドはイランの中央部にあるヤズド州の州都です。ゾロアスター教文化の中心地であり日干しレンガで造られた美しい旧市街地は世界遺産ですが、他のどこよりも忘れられない訪問地は砂漠地帯です。観光地として安全に楽しめる公園になっているのですが途方もない規模の大自然そのもので、必要以上に離れたところまで行かないようにと注意されました。というのも、方向感覚が狂っていくような広大無辺の空間で、風景に誘われるままに進んでしまうと、いったいどの方向から自分が来たのかわからなくなるのです。ある距離を離れるとどんなに大きな声で呼んでも、相手の姿が見えているのにまるで砂に吸い込まれたかのように声が届かなくなるという、大自然ならではの不思議な現象も体験しました。

印象的なこの2つの訪問地は都市部とは異なる、イランの大自然の魅力を体感した素晴らしい夏の自動車旅行でした。

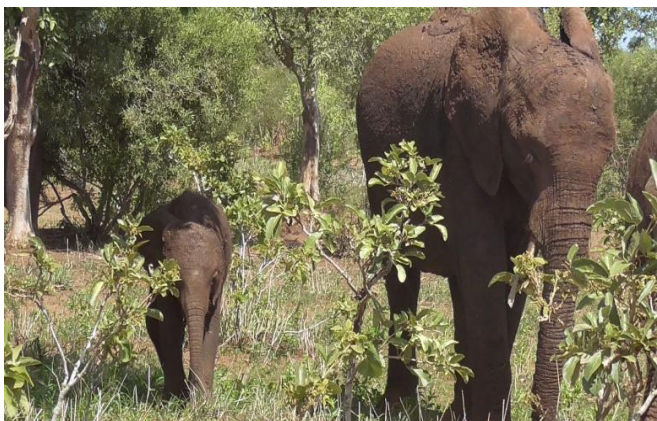
最後に新年についてご紹介します。3月春分に迎えるイランのお正月は人々にとって最も重要な休暇です。子どもたちの学校はおよそ2週間、大人たちのほとんどの仕事もそれに準じて休みになり首都テヘランから人も車も忽然と消えて特別な光景が見られます。旅行に出るよりも伝統的な新年行事を大切に過ごす人が多いように感じました。縁起物の美しい正月飾りを設え、親戚一同が年長者の家から順番に挨拶に回ったり、さらには日本のように十二支やお年玉の習慣もあるのには驚きました。日本ではお年玉を子どもたちに渡すのが一般的ですがイランでは子どもだけでなく、マンションの管理人や運転手など日頃お世話になっている人にも渡します。



アフリカ

サバンナでサファリツアー

私が3年間過ごしたモザンビークはインド洋に面した縦長の国で、自然は豊かですが残念ながら観光産業が未発達のため、なかなか旅行に行けるような場所がありませんでした。首都マプトは国の最南端で南アフリカの国境近くにあり、車では数時間で国境を越えられるため、多くの外国人は南アフリカに旅行や買い出しに出かけていました。そんな週末の過ごし方として人気だったのがサファリ。広大な国立公園をドライブしながら野生の動物に遭遇する、というもので、日本からもケニアやジンバブエのツアーが有名です。南アフリカのクルーガー国立公園はモザンビークの国境に近いところにあるため、我々にとっては最も気軽に行ける観光地でした。



クルーガー国立公園は日本の四国地方と同等の面積を

有し、複数のゲートから出入りできます。敷地内にはレストランや宿泊施設もあり、数日間滞在しながらいろいろな動物との遭遇を楽しむことができます。生態系を守り、自然の営みを邪魔しないような努力の下、運営されています。

サファリを訪れる際、多くの人が目撃したいと願う大型動物；象、サイ、ヒョウ、水牛、ライオンをBig Fiveと言います。その中で特に目撃するのが難しいのがヒョウとライオンです。夜行性のこれらの動物に遭遇するのに最適なのが夜と早朝のサファリツアー。この時間帯は家用車で走行が禁止されているため、いわばサファリにとっては稼ぎどころ。定員20名くらいのジープに乗り込み、複数のグループが各宿泊所から出発します。目の利くドライバーが動物のいそうな水場などを周り、ドライバー同士も連絡を取り合い情報交換しながら、客が求めるBig Fiveに遭遇できるよう尽力してくれます。2時間近いドライブの中、生き物らしい生き物に全く遭遇せずただひたすら自然の中を走る時間もあれば、運よくヒョウやライオンが捕食している瞬間に出会えば皆息を殺してその様子を見守ります。



旅行で訪れる場合はどうしても何にどれだけ出会ったか、つい成果物を求めてしまいがちですが、何回も通う醍醐味は、その都度思いがけない発見があることです。夏は緑も豊かで見通しが悪く、雨季で水分も豊富なため、動物たちは食料を探して彷徨う必要がなく、我々にとっては目撃できる可能性が低くなります。一方でこの時期は出産シーズンでもあるため、かわいい仔象や仔サイ、仔インパラに出会うチャンスでもあります。冬の乾季には水を求めて池や川沿いに動物を見つけやすく、より多くの動物を見る楽しみがあります。上級者になると、Big Fiveには興味を示さず、ひたすら空を見上げ、珍しい鳥を追う人や、じっくり見ないと見落とす小動物を探すことに楽しみを見出す人もいます。

車という鉄の鎧に守られながら、自然界の営みをちょっと覗かせてもらう、という気持ちで訪れる自然公園は、動物園や、日本にいたときにイメージしていた「サファリパーク」とは全く違うものでした。せっかちで忙しい日本人はとかく旅行を「こなす」ことに重きを置きがちです。名所を巡り、写真を撮って次の場所へ移動。見るべきものを見て次にGO！私も日頃はそんな旅行ばかりしています。しかし娯楽らしい娯楽がないアフリカでの生活の中、週末や祝日に、唯一の娯楽と言えるクルーガー国立公園に行き、過ごす休暇は、そんな旅行とは全く違う、しかし同じくらい豊かな経験や発見がある過ごし方だと感じました。欧米人が過ごす休暇の醍醐味を少しばかり味わった気がします。



ヨーロッパ 学友との距離を縮めたスキーツアー

初めてノルディカのスキーブーツを履いたのは父の転勤に伴いドイツで迎えた1年目の冬でした。通っていたインターナショナルスクールが2月の長期休暇の間に主催する10日間のスキーツアーに参加するために買ってもらいました。初心者には板はレンタルで十分でもブーツは自分の足に合ったものが良い、という両親の考えでした。行先はスイス南部ヴァレー州SaasFee(ザースフェー)、スイス最高峰のDom(ドーム)山をはじめ4000m級の高峰が連なる山々に囲まれている小さなスキーリゾート地です。一年中ウィンタースポーツが盛んでスキーの聖地。私は初体験のスキー、しかも親元を離れ国境を越えての冒険にドキドキしていました。

ハンプルク中央駅で大勢の家族に見送られながら列車は出発しました。汽笛の音と共に暗闇の中を出発した時の興奮は今でも思い出します。ヨーロッパのクラシカルなボックス席での楽しいおやつとおしゃべりタイム、車両の中を行き交うみんなの高揚した表情。面識はあってもまだ言葉を交わしたことがなかった人と目くばせする。この時点でもう距離がぐっと縮まりました。寝台ベッドを整えカーテンを引き、心地よい揺れにすぐに眠りにつきました。



「みんな起きて！外を見てごらん！」先生の声で目覚め、車窓の外に目を向けるとこれまで見たことがない素晴らしい景色が広がっていました。青い空に雪化粧した山々。深い森林の谷間を縫うように汽車は大きくカーブし、何人かは車窓から顔を出して大声で叫んでいる。先生方は騒ぐみんなを注意しながら笑っている。雄大な自然は誰をも笑顔にする瞬間でした。スイスの終点駅から更に2時間バスに揺られてやっと半日がかりで山の麓の可愛い宿(Log house)に着きました。

出迎えてくれたのは世界中から集まった若いインストラクター達。アメリカのコロラドからオーストラリアのパースまで、また偶然にもイギリス在住の日本人のお兄さんも来ていました。自費で入村し、無給でインストラクターをしながら宿と食事とリフトパスが提供されスキー放題、まるで夢のようだと語っていました。私はこんな自由な生き方があるのだと驚きました。私達はレベル別に分けられ、宿から毎日お弁当(大抵ハムとチーズのサンドイッチ、りんご丸々一個、スイスチョコレート、飲料)をもらい、真っ白で上質な雪のゲレンデで思う存分7日間滑りました。私はその広々としたゲレンデで滑らかにボーゲンしながら転んでも痛くないという恵まれた条件の下、スキーを覚えました。緩やかな斜面でも大自然を感じながら滑走し、一日の終わりには直滑降してスピードの醍醐味も味わいました。



林間コースでは野生の鹿と出会いました。最終日はインストラクターや生徒と先生で混成されたグループでスキットを披露し合い、盛大にチーズフォンデュでお別れ会をしました。

休暇明けの登校では学年を超えて挨拶してくる友達が格段に増え、一緒に生活した先生方とも気軽に話せるようになりました。その後2度もツアーに参加させてくれた両親に感謝しています。そしてこの経験はのちに、日本に帰国しシーズン毎に長野県白馬村で住み込みのアルバイトをしながらスキー三昧の日々を送る青春時代につながるのです。

インド 買い出し休暇とスリランカの旅

私達がインドに住んでいた時、インドの現地校の夏休みは4月から5月ですが、子供達はインターナショナルスクールに通っていたので、6月中旬から約2か月間長い夏休みがありました。6月から雨の季節となり旅行シーズンではないので、世界各国から来ている駐在員家族は、長期休暇中自分の国に一時帰国していました。

インドはいろいろな宗教のお祭りをそれぞれ祝日としているので、休みの日も多かったですと思います。また駐在中は「静養休暇」、「買い出し休暇」と言って、年に数回タイやシンガポールに日本食を買い求めに行くことが会社で認められていたので、その旅行を楽しみにしていました。

例えば朝早く現地に着いたら、まずマクドナルドのモーニングセットを食べ、日本食スーパーが開店したらインドに持ち帰る食品をカート一杯に買って梱包してもらい（そのサービスがスーパーで提供されていました）、その後もラーメン、お寿司や焼肉等、普段食べられない料理を旅の期間中にいっぱい堪能してインドに戻りました。

10月末から11月初めに、インドのお正月と言われている

Diwali(ディワリ)の祝日があり、光のフェスティバルと言われ、街のあちこちで花火や爆竹が打ち上げられます。

その音があまりにも大きく夜中まで続くため、この休暇中は騒音から逃れるようにインド国外に出る駐在員家族が多かったです。



「買い出し休暇」の他にインド国内外を旅行しました。特に印象に残っているのがスリランカ旅行です。私達に住んでいた Bangalore から飛行機で1時間足らずなのですが、飛行機から降り立つと街の様子が全く違いました。日本の会社名の入ったマイクロバスが走り、インドでは宗教上女性は足首を見せないのですが、仏教徒の多いスリランカはスカート履いている女性が多かったことが新たな発見でした。世界遺産のシーギリヤ・ロックに高所恐怖性の息子が泣きながら登頂したこと、旅行中に食べたカレーがインドカレーより辛かった事など、懐かしく思い出されます。



インドから帰国後アメリカに再赴任しましたが、飛

行機で周辺諸国に旅行に行く回数はグッと減ってしまいました。インドでは生活環境の違いに苦勞することが多かったですが、行ったことのない場所を訪れることができたことは、今でも私の貴重な体験となっています。

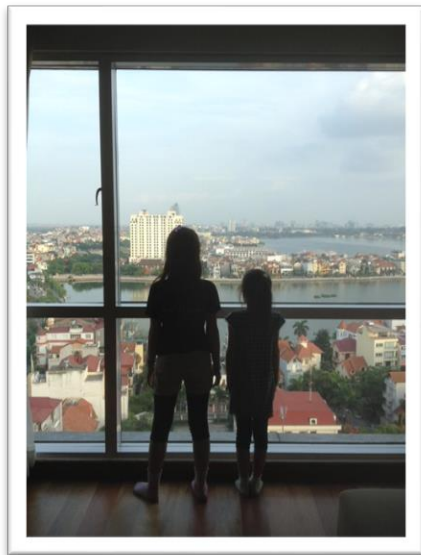


ベトナム

日本人学校への体験入学

ハノイで娘たちが通学していたインター校の夏休みは、6月半ばから8月半ばまでの2か月間でした。毎年娘たちは、6月半ばから約1か月間、同じくインターに通う日本人の生徒数名と一

緒に、ハノイの日本人学校に体験入学させていただきました。習い事やイベントなどで知り合った日本人の友達と、短い期間ながら同じ学校で学校生活を送るのは新鮮で楽しかったようです。



特に次女にとっては、初めての「日本

の」小学校生活ということで、初めはインター校との違いに少し戸惑うこともあったようですが、クラスメイトや先生方があたたかく迎えてくださったおかげで、楽しく毎日を過ごせたようです。イレギュラーな形であるのにもかかわらず、さまざまなことを調整して受け入れてくださった先生方には今も感謝の気持ちでいっぱいです。また、この体験のおかげで、次女は帰国後の小学校生活にも早く馴染めました。終業日にお別れ会を開いていただき、クラスの皆さんから「来年もまた来てね」という寄せ書きをもらったことや、優しかった友達のことを今も覚えているようです。娘たちだけでなく母親の私もあたたかく迎えていただきました。クラスのお母様方が企画した学期末の懇親会ランチにもお誘いいただき、日本人の「ママ友」が増え、その後のハノイ生活でも大変お世話になりました。

海外で現地校やインター校に通うお子さんは、我が家のように赴任地の日本人学校に体験入学させていただくほか、夏休みの一時帰国の間に日本の地元の公立小学校に体験入学するケースもあるようです。

いずれも、お子さんにはとても貴重な経験になりますので、夏休みの過ごし方の一つとしてお勧めします。ただし、受け入れていただけるかどうかは学校によりますので、早めに学校にお問い合わせください。



中国

晩夏の内モンゴル

中国では邦人を対象とした日系の旅行社による様々なツアー企画があります。中国の長期休暇である5月の国慶節、2月の春節、春休み、夏休みが近くなると、フリーペーパーの紙面に国内外の興味深いツアーがたくさん掲載されます。私たち家族は、その中の「内モンゴルツアー」に参加しました。内モンゴルは気候が厳しいため、7月から9月の夏季限定のツアーでした。



子どもたちは国語の教科書で読んだ『スーホの白い馬』の舞台と同じ景色を見たり、馬頭琴に触れたりできて、とても嬉しそうでした。大草原を馬に乗ってトレイルしたり、パオに泊まったり、モンゴル相撲を観戦したり、小学生にとって体験型のレジャーは大いに楽しめたようでした。もちろん大人も、見たことのない自然の大きさや美しさに感動を覚えました。



海外にいる間は、その国の文化や歴史を肌で感じる事ができる貴重な機会に恵まれます。中国では日本語のガイド付きのツアーが充実していたので、子どもたちがもう少し大きく中学生くらいだったら、西安や敦煌など中国の歴史探訪の旅にも行ってみたいかなと少し心残りに思っています。

子どもたちにどのような経験をさせてあげようか、楽しい思い出を作ってあげたいと、特に長いお休み期間についての過ごし方は、親にとって悩ましい事柄です。しかし、親の意図に反して、子どもたちは旅行のことはほとんど思い出すことはなく、意外にも日常の些細なことが思い出であったりもします。『どこ』で『何』をすることが重要ではなく、家族で楽しく充実した時間を過ごすことが家族全員にとって一番なことなのかもしれません。

中国 ニュージーランドでホームステイ

小学6年生の春休みに、息子は3週間ニュージーランドでホームステイをして過ごしました。小学生を引き受けてくれるのか、良いホストファミリーに恵まれるのか、不安はありましたが、上海にある教育相談を専門とする団体をお願いすることができました。その団体を通して、

ニュージーランドで日本人の留学の手配をする代理店にすべてのアレンジを依頼しました。

まず、学校のリストアップをお願いし、学校選びをしてから学校経由でホームステイ先を探してもらいました。



ホストファミリーは南アフリカからの移民のたいへん親切なご夫婦で、息子を気遣ってスーパーの日本食コーナーで度々お寿司を買って食べさせてくれたそうです。

学校では留学生のケアをする専任のスタッフが学校生活をサポートしてくれました。手配をお願いした代理店のスタッフは週1回必ず学校を訪問し、学校での様子やホームステイ先での生活を聞き取って、上海の私たち家族に報告をしてくださったので、親も子も安心して留学期間を過ごすことができました。その手厚いサポートは、現地の携帯電話のSIMカードの購入に始まり、ニュージーランドドルの現金の用意など、生活に支障がないようあらゆる環境をきめ細やかに整えてくれました。小学生で3週間のホームステイは本人と家族にとって大冒険でしたが、心豊かな人たちの優しさに触れ、たくさんの貴重な体験ができて、実りの多い3週間になりました。

東京、上海と大自然の環境にあまり縁のなかった息子は、ニュージーランドの広大な緑の大地にすっかり魅了され、3年後に同じ代理店をお願いして再びオークランドに飛び立って行きました。今、息子に当時の経験をどのように受け止めているのか聞いてみたところ、「まったく寂しいことはなかった、いろいろな人に出会えたことがとても楽しかった。でも、3年後の方がもっと楽しかった」と。年齢が上がることで、自分でできること、チャレンジできること、自由度が増えたからというのが理由だそうです。





アメリカ

日米 夏休みの過ごし方

アメリカでは6月の中旬から8月の下旬まで2か月以上夏休みです。夏休みといえばサマーキャンプ。人気のあるものからすぐ埋まってしまうと聞いていたので、年明け頃からHPをあれこれチェックし、子どもに行きたいサマーキャンプを選んでもらいました。2人の子どもそれぞれの夏休みを、全てサマーキャンプで埋めてしまっは大変な出費になるので、County 主催の割とリーズナブルな日帰りキャンプ5日間を1人3つほどにしました。スケートキャンプやアスレチックキャンプ、陶芸キャンプなど、音楽・美術・体育系など各種バラエティに富んでいて、子どもたちの身には付かずとも夏の楽しかった思い出として今も残っているようです。



キャンプのない週は、午前中は読書をし、午後は友人とお泊り会をしたり、近所の公営プールで泳いだり、学校のある時期にはなかなかゆっくり

行けない郊外のお店や市街地の観光名所に出かけたりして過ごしました。週末の近郊への果物狩りも楽しみました。

しかし、2か月以上の夏休みはとにかく長く、いったいアメリカの子どもたちは、宿題もない夏休みを毎年どう過ごすのか、サマーキャンプと家族旅行でひたすら楽しく遊ぶのだろうか…、という謎が解けないまま、数年の滞在は終わってしまいました。日本に一時帰国した夏休みは、何かと慌ただしく過ぎたため悩まずに済んだものの、帰国しなかった年の夏休みは、あまりの長さ途方に暮れる思いでした。当時、家庭教師をしてくださっていたアメリカ人の先生(60代)にも伺ってみたのですが、遠い目で「そうねえ、長かったわねえ…うちの子供たちは何をしていたかしら…」、といったお答えしかいただけなかったのを覚えています。

アメリカでの夏を過ごしてみてもしみじみと、それまで何とも思っていなかった日本の夏休みというのも良いものだと思います。朝6:30の近所のラジオ体操のおかげで早起きして生活のリズムもできますし、朝食の後は少し宿題をして、9~10時頃に近所の友達と学校に行きプール指導を受け、帰ってきたらもうお昼。プールのおかげで

体力も付きましたし、一日の半分があっさりと終わっていくのは親としては何よりありがたいものでした。5週間という夏休みの期間も、学校から出される宿題の分量も、今から思えば絶妙でした。子どもたちは自由研究や読書感想文を毎年とても嫌がっていましたが、研究テーマをあれこれ考えたり、作文を書くための本を書店でじっくり探したりするというのも良い経験だったと思います。



アメリカ

本物に触れて学ぶサマーキャンプ



アメリカの長い夏休みをどう過ごすかは、毎年春頃にスケジュールを組むことから始まります。長男が小3、長女が小2で渡米しましたので、在米中の約6年半はたくさんのサマーキャンプに参加しました。

長男は野球一筋でしたので、さまざまな野球関連のキャンプに参加しました。なかでも印象的だったのは、地元サンフランシスコ・ジャイアンツのOBが主催し、クリスピークリーム・ドーナツが後援をしている「ジャイアンツキャンプ」です。



とても人気のキャンプなので、すぐに定員に達する盛況ぶりです。全員お揃いのTシャツを着て、メジャーリーグのチーム名でグループ分けをし、最終日には優勝チームを決める試合をします。午前中はポジションごとの練習、午後は試合形式で練習をします。小学生が対象なので、昼食後の時間はアスリートの栄養を簡単に解説し、ジャンクフードはやめて野菜と肉をバランスよく食べる大切さも教えてくれます。毎日OBがグラウンドに来て、子どもたちにサインをして記念写真を撮ってくれました。プロ野球選手を夢見る子どもたちに絶好のプログラムだったので、どの家族も親子で楽しんでいました。

サイエンスキャンプに参加した時は7月4日の独立記念日が近かったので、凧や紙飛行機、風車などをすべて星条旗のデザインで作って、パレードをしました。小学生には少し難しい物理学や化学の勉強を遊びや実験をしながら教えてくれたキャンプでした。なぜ紙飛行機は飛ぶのか、星の動きなど、普段の生活でふと疑問に思ったことを深く掘り下げるお勉強のキャンプです。



長女は体操、油絵、水泳、ダンス、スケート、ドラマ、テニスなどさまざまなキャンプに参加しましたが、アートキャンプはとても楽しかったと、今でも思い出しています。地元で活動をしている画家の先生が自宅を開放して、子どもたちに油絵、水彩画、粘土細工、木工細工、ドラマを熱心に教えてくれました。

中学生になり楽しいだけのキャンプでは物足りなくなってくると、スポーツメーカーやスタンフォード大学が主催するテニスや野球のキャンプに参加するようになりました。能力別にグループ分けをして練習するほか、フォームを撮影してもらってアドバイスをを受け、個々のトレーニングメニューにそって練習をし、それぞれのスキルアップを目標としていましたのでかなり本格的でした。

また泊まりがけで遠征に行くキャンプもあり、希望する親は同行することもできました。



夏休み中のほとんどをスポーツや勉強、芸術系のキャンプに参加していましたので、車で送迎をしていた私はとても大変でした。長男と長女は別々のキャンプに参加することが多かったため、毎日100km以上を2往復は当たり前で、2か所の距離を考えて時間のやりくりをするのが一番苦労しました。

すでに社会人になった子どもたちが「楽しかっただけでなく、日本人がいなかったこともあって英語力が身に付き、文化や習慣も経験できたのでとてもありがたいと思っているよ」と言ってくれます。当時はただ夢中で過ごしていましたが、今はとても懐かしく、私も楽しませてもらったサマーキャンプだったと思いました。

海外赴任者のバイブルといえば

海外赴任ガイド

海外赴任ガイド 検索

各種手続き、教育、引越、医療など出発前に知っておくべき知識と情報を網羅！



海外出国前のお車売却



海外赴任時専門の車買取
出国直前まで乗れる！
マイルもたまる！



車売却
ご相談



0120-322-755

Webからのお申し込みもできます！



全国対応可能！ 離島 沖縄は除きます。
株式会社 JCM 本社：東京都千代田区神田錦町 3-13
JCMは皆様の愛車をオークション・買取等を通じて業界に供給する会社です。

＜個人情報の取扱いについて＞ お客様からお預かりした個人情報は、本サービスを円滑・的確に提供するために利用し、ご本人の了解を得ず第三者への開示・提供や目的外での利用はいたしません。詳しくは <http://www.jcmnet.co.jp/common/privacy.htm> をご確認ください。
【個人情報取扱いに関する問い合わせ先】 株式会社 JCM 流通事業部 ryutsu@jcmnet.co.jp

IR.211

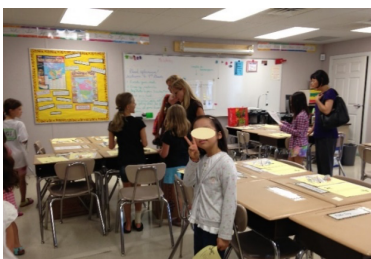
海外生活を振り返って

我が家の海外生活は、夫は3年の任期でしたが、長女の学校の復学の都合上で、娘2人と私は最初から2年で帰ることに決めていました。小4・中1の娘2人は、2年間アメリカ・ワシントンD.C近郊（ベセスダ）の現地校で過ごし、帰国後は、赴任前に在籍していた小学校の6年生・中学校の3年生に復学しました。

滞在が2年間と短かったこともあり、帰国後、「帰国生」を自覚されていたのは、次女が中学を帰国枠で受験した前後せいぜい1年程度でしたが、あの短い2年間の海外生活が娘たちに与えた影響は、意外と大きかったように思います。

当初「海外に引っ越す」と聞いた時は、「子どもたちは、現地でサッカーや野球、チアリーディングなどの集団スポーツチームに入って週末や夏休みは遠征に行ったりするのかな？」といった華やかな生活をイメージして夢を見ていたものです。しかし、実際暮らしていたアメリカでの2年間の生活は、日本とあまり大きく変わることはなく、いつも一定のスケジュールで、日々淡々と暮らしていたように思います。

朝は6時半に起き、朝食の後は毎日30分程度、日本の勉強（国算）をし、バスで登校、夕方決まった時間に帰宅。その後は、姉妹・友達と遊び、宿題があれば片付け、夜も日本食を食べ、お風呂に入って早く寝ました。



登校初日のクラスルームで担任の先生やクラスメイトと顔合わせ



数か月過ぎ、日々の生活リズムが整ってきたところで、少し余裕ができました。子どもたちも、何か日本で続けていた習い事を1つやりたいということで、近所の教会でバイオリン教室を見つけて細々と

フレンズスタッフ C.O.

再開しました。

英語を早く覚えてほしい、できれば日本の勉強も遅れを取らないようにしておきたい、などなど、いろいろ親としては望むところがありましたが、日々の生活では、まずは学校に楽しく行ってほしい、アメリカに対して悪い印象を持たないようにしてほしい、という気持ちで過ごしました。日本の補習校への入学も検討しましたが、あまりあれこれ詰め込みすぎても虻蜂取らなくなるかもしれないと夫婦で話し合い、きっぱり諦めました。週末は家族で現地での生活を楽しむことに集中し、その代わりに、国算（漢字と基礎的算数）だけは毎朝継続して頑張ろうと、子どもたちと約束して決めました。

最初の1年目は、2人とも英語がよく分かっていなかったようで、今から思えば、親にはあまり言わずとも、つらい思いで登校していたのだらうと思います。当時は、あまり根掘り葉掘り聞かないようにしていましたが、特に長女は、全く英語ゼロの状態での7年生に放り込まれ、本当に大変そうでした。学校でのESLが良かったようで、英語の習得はそれに大いに助けられて何とか食らいについてはいたものの、ESLと同時並行で学ぶ数学や歴史など、中学での勉強に出てくるワードはやはり難しいと、平日の宿題に手こずっていました。当時、毛糸や段ボール、新聞紙を使って細胞の模型図のようなものを四苦八苦しながら作っていたのを見た時には、親ながら大変驚きました。一方、4年生だった次女は、同じく英語はゼロ状態でのスタートでしたが、学年が少し低かったこともあり、宿題もあまりありませんでした。次女にとっては、小学校の10時のスナックタイムは息抜きとして大いに役立ったようです。クラスの中で、次女は「美味しい『ハイチュウ』をよく持って来てくれる人」として認識されはじめたのが良かったのか、放課後のプレイデートやお泊りのお誘いなど、ボチボチお声がかかるようになりました。家での会話でも、友達の名前がいつも出てく

るようになり、自分なりに居場所を見つけられるようになってきたように感じられて夫婦でホッ



インターナショナルナイトでは大巻きがよく売れました。

としたものです。4年生の学年末の遠足や、5年生の学年末の修学旅行には、私もクラスの子どもたちの引率ボランティアのお手伝いをしました。学校のクラスの雰囲気などが分かっただけでなく、英語が全く話せなかった次女が植民者の歴史の長いレクチャーを、つまらなそうではありましたが聞いているのを見て、とりあえずここまで来られただけでも良かったな、としみじみうれしく思いました。



今振り返ると、我々の現地での生活は、家族ぐるみでお付き合いさせていただいていた日本人の何軒かの方々に大いに支えられていたことを改めて痛感します。日本ではほとんど意識することのなかった同胞のありがたみでした。子どもたちは、現地校になんとか馴染んでいけるようになるまで学校生活のハウツーなどを教えてもらい、その後も日本語で思い切り素をさらけ出しながら遊んでいました。海外での緊張する生活の中で、皆さんと和菓子やお茶などをいただいている時間は、私自身にとっても心穏むひと時でした。子どもたちが日々の生活を頑張っていたのは、この方々のおかげだったのだろうと、今も温かい気持ちでいっぱいになります。子どもたち同士は今でもたまに連絡を取っているようで、サバイバル時代を共に生き抜いた戦友のような存在なのではないかと思えます。



月日の流れは早いもので、赴任当時、小・中学生だった娘たちは2人とも大学生になりました。今回、このコーナー「がんばる帰国生シリーズ」への投稿を依頼されての最初の感想は、「当時の娘たちは、向こうで何を頑張っていたのだろうか…? 『がんばる』と言えるほど頑張ったものは…?」でした。本人たちにも「向

こうで頑張っていたこと、何か思い出せる？」と尋ねてみましたが、やはり同じ答でした。

娘たちに7年前の当時を振り返っての感想を聞いたところ、「日本人が自分の学年にはほとんどいなくて当時は『しんどい』と思っていたけれど、自分があそこで少数派の『外国人』となる体験をしたことは良かった」「英語が分からなくてあの時は大変だったけれど、あれはあれでまあ何とかなっていたのだな、と今となっては思う」とのことでした。日本ではなかなか「想定外」にも数多く出会えたと思います。それらのおかげか、今の彼女たちには、ここぞというときには非常に「テキトー」にその時その時を乗り切る肝の太さのようなものを持っているように感じられる瞬間がたまにあります。特にコロナの初期にはいろいろ救われました。

現地でのさまざまな出来事が、年月を経て熟成されて子どもたちの今の生活に繋がっているのだろうかと思うと、海外生活を経験できたことは我が家の一つの僥倖だったなと今しみじみ思い出しています。



修学旅行(1) Jamestown(*)の船着き場でのレクチャー。遠足や修学旅行のテーマは常に「入植者たちの暮らし」「独立戦争」でした。



修学旅行(2) Colonial Williamsburg(**)にてコスプレガイドによるレクチャーを受けている様子

(*) イギリスが北アメリカに建設した初めての永続的植民地。
(**) バージニア州にある歴史地区。当時の衣装に身を包んだ俳優が植民地時代の日常生活を再現している

海外生活 車・運転事情



海外生活で一番の課題は交通の便。住む国、地域、環境によってその事情はさまざまです。公共交通機関が発達している一部地域を除いて、自分で運転やタクシーとの付き合い方など、日本とは違うルールに戸惑うことも。

アメリカ：州によって運転ルールが違うアメリカ。ほとんどの地域で車は生活必需品です。そんな地域性に富んだ情報を集めてみました。

免許証 編

- ・免許取得のためのテキストには日本語版もあり、ペーパーテストも日本語の選択が可能。ただし翻訳された日本語がおかしいので逆にややこしいのであえて英語で受ける人もいます。 (ニューヨーク)
- ・運転実技試験に縦列駐車が無い。 (カリフォルニア)
- ・カリフォルニアの免許証は、視力検査さえ合格すればテキサス州の免許証を発行してもらえます。(逆の場合は筆記試験の合格も必要) (テキサス)
- ・高校の授業で Driver Education というのがあり、試験に合格すると仮免がもらえ、教習の先生や有免許者と計50時間の路上教習をする。16歳の誕生日に学校を休んで実技試験を受け、翌日車で登校するのが高校生の憧れだった。(イリノイ)

交通ルール 編

- ・スクールバスの安全第一。スクールバスの停車ランプが点滅を始めると対向車、後続車は即停車すること。怠るとスクールバスの運転手や目撃者に通報されることがありますので、要注意！
- ・赤信号でも左側から車が来ていなければ、一時停止し安全確認した後右折可能。(ニューヨーク)
- ・車を縦列駐車する時には、万が一、車が動いてしまっても前輪が縁石に当たって止まるようにハンドルを切ってから、パーキングブレーキをかける。
- ・急勾配な坂道になると、縦列駐車はせずに道路に対して直角に駐車する。(サンフランシスコ)

ヨーロッパ：EU になって以来、EU 圏内の国境を通過する時もそのまま通ることができます。しかし国によって交通ルールが違うので注意が必要な場合も。

ベルギー

- ・信号機のない交差点では常に右が優先。自分が直進していても、右の細い道から車が飛び出してくることがあるので常に右に気を配って運転する必要がある。
- ・携行品としてミニ消化器、蛍光ベスト、三角表示板を車に積んでおくことが義務付けられている。

オランダ

- ・日本の道路標識はオランダから学んだという説もあり、日本人には馴染みやすい。
- ・オランダは隣国に比べて道が良く、国境をこえてドイツやベルギーに入ると道路が少しガタガタするので、国境の看板を見落としてもすぐにわかるのも楽しい。

フランス

- ・ワインが生活の一部だからなのか、日本より飲酒の規制が緩く、血中アルコール濃度 0.5mg (グラス1杯程度) までは飲酒運転にはならない。
- ・アルコール探知機を車に装備することが義務付けられており、EU の他の国から来る車にも装備が求められている。

ドイツ

- ・言わずと知れた「制限速度のない高速道路」アウトバーンがあり、ドイツ車が高速運転の安定性に定評があるのも納得。高速道路では 150km/h も自然と出してしまうがちで、国境渡ってもうっかりそれで走行していると捕まります。



アジア：多くの国で、自家用車の運転は難易度が高く、日本の駐在員は運転を禁止されているケースがほとんど。そんな時活躍するのがタクシー。その国独自の乗り物もあり、旅行者ではなかなか乗りこなせないものも。

中国 (上海)

- ・シェアバイク (自転車のレンタル) のスポットが市内の至る場所にあり、それぞれにアカウント登録をして利用する。
- ・子どもが公道で自転車に乗ることは交通違反。
- ・タクシーは安い。アプリでタクシーを呼んで利用する人が多いので、帰宅時間などの混み合う時間は流しのタクシーを捕まえることが難しい。

タイ (バンコク)

- ・シーロー (軽トラックの荷台にベンチと屋根のついた乗合タクシー) は行先の方向性が一緒なら途中で乗降車 OK の便利な市民の足。住宅地が多い中心地を中心に流している。タクシーより安く、気軽な交通手段。日本人利用者が多いせいか片言の日本語とタイ語でコミュニケーションが取れる。
- ・パジャイ (別名トゥクトゥク) は王宮界隈の観光地を中心に走っている。片言の英語も話し、気軽に使えるがぼったくりも多いので注意が必要。

シンガポール

- ・公共交通機関もタクシーも非常に安いので市民の足としてとても便利。電車・バスはペット不可なのでペットとの移動にタクシーを利用するという人も。
- ・自家用車を所有するにはその権利を買う必要があり、なんと 700 万円くらいする！渋滞対策で台数制限するのが目的とか。

ベトナム (ハノイ)

- ・日本人にとっては運転の難易度が高く、会社から禁止されているケースがほとんど。しかしタクシーが安いので、日本では決して乗らないような超近距離でも乗ったりする (全然嫌がられない)。
- ・地元の人はどこに行くのも皆バイク。2人、3人乗りも当たり前でバイクタクシーも良く見かける。街中を歩いているのは外国人旅行者くらい。



[インドの田舎から海外・日本へ]



私は1977年にムンバイ郊外の田舎で生まれました。工場で働く父親と裁縫をする母親、5歳年上の姉と4歳年下の弟がいる温かい家族で育ちました。食べるのに困りはしませんでした。一年に洋服は母が縫った2枚、靴は1足、という経済的状況でした。家の周り是一片緑の田んぼが広がり牧場もたくさんあって、毒蛇がよく出る地域でした。実家から数キロのところインドでもトップレベルと評される国立小中学高校があり、運良くこの学校で勉強することが出来ました。幼稚園から四つの言葉を学び、小さい頃から数学が好きでした。1994年に大学(理系)に入学すると共に同大学の日本語学科にも入り、私立校で情報処理を学びました。当時の大学の年間学費は理系5,000円、日本語学科600円とIT校は5,000円でした。今も大きく変わっていません。インドは多くの子どもに教育の機会を提供しているのです。そして、1996年末に日本国外務省が全世界で実施する優秀者奨学金試験に合格し、世界各国から招待された数十名の一員として初来日。その後、1999年にもう一度日本に留学し、国際交流基金センターで学びました。

[日本の職場で育つ] 2000年から日本人と働き始めましたが、その中で日本人上司から教わった一番印象的なことは「自分の脳を信じるな。思うこと、やりたいこと、全てを文字又は絵にして」と言われたことです。まさにその通りです。脳の想像力はすごいもので、必ずしも現実的なものを想像している訳ではないです。ハリウッド(インド映画の制作中心地であるムンバイの俗称)映画を観て育った自分は確かに想像力豊かでした。紙で具体化した時に初めてできることとできないことの現実が見えてきます。また別の日本人上司から「よぎさん、例えばカメラ又は携帯電話などを購入した時にマニュアルを詳しく読んでから使い始めたことはありますか」と問いかげられました。一般的な消費者はマニュアルなど読まないから、マニュアルを読まなくても使えるような製品づくりを促されました。日本に来てから日本風の手帳の整理、スケジュール管理などを学び、一社会人として育てられたのです。感謝しています。但し、私はホワイトカラー業界だったので恵まれている気がしますが、技能生をはじめとしたその他の業界については課題が山積しています。特に技能実習生の扱いについては制度を廃止することにまで議論が拡大しています。また、日本語ができない

方々の悩みも色々あると思います。

[日本人と外国人コミュニティとの関わり]

情報技術(IT)の仕事をして中野区、町田市、市川市などを転々とした後、2005年に江戸川区西葛西の小島町二丁目団地(1500世帯余り)に引っ越しました。ここで地域のインド人の集いなどのお手伝いも始めたのです。引っ越して間もなく夏祭りです。よくみると年配者だけで準備をしています。私も勝手にテーブル、椅子、テントなどの設営を手伝いました。以降、団地内の餅つき大会、敬老会、掃除活動などに積極的に参加しました。西葛西のディワリ祭の運営などを通じてインド人コミュニティをまとめるようになり、インド人の困りごとなどについてSNSで発信するようになりました。翌年、団地の自治会から役員に任命され、団地内の日本人と外国人間のトラブルに関わるようになったのです。ここで直面したのは外国人の住まいの問題です。UR都市機構や公団のお陰で多くの外国人は都内で住まいを獲得できています。但し、今でも、外国人に部屋を貸さない民間オーナーが多いです。理由は、独特な臭いが残ることと、保証人が見つからないということです。後者については近年、保証会社に対応してくれますが、前者はいまだに解決策がありません。オーナーの気持ちも分からない訳ではないですが、長期目線の全国的な対応を考えなければなりません。



[外国人は日本のマナーを知らない]

当時、この団地の2割以上の世帯は外国人でした。ベランダでうるさく電話をしている、テレビの音量が大きい、子どもが廊下で走っている、夜の遅い時間の話し声、ゴミの間違った分別などが日本人と外国人の間のトラブルの一般的な原因です。両者の話を聞いてこの時に思ったのが、インド人・外国人は日本のマナーを守りたくない訳ではなく、日本のルールを熟知していないのだ、ということです。そこで団地内で外国人向けの講習会を開くことにしました。日本人に対しても外国人の背景などを理解してもらう、「異文化理解から多文化共生へ」の旅が始まったのです。インド人コミュニティではSNSで情報共有を開始しました。外国人が増え続ける中、もうこのレベルでの努力だけでは足りないです。行政からの対応が不

可欠で、マナーやルールの動画を SNS に掲載し、外国人が入居届けをした際に強制的にその動画を見てもらうなど工夫が必要です。各自治体のウェブサイト、手続きの多言語化も求められています。

[年配者世代との交流] 住んでいる団地の町会の役員となり、高齢者世代

との交流が増えてきました。団地の低層階にたくさんの年配の方が住んでいて、その方々と話す時間が余っていて退屈されていると聞きました。息子を連れて行ってみなさんとおしゃべりしたり、出かけたりしていましたが、その中で10年以上もやり続けているのはパソコン教室と春秋の旅行です。このような活動を通じて地域の年配者の気持ちも少し理解することが出来たと思います。そして、みんなに見守られている気がします。近年、日本人の世代間の交流が減っています。地元での祭りの運営が危うくなっているところもあります。逆に、年配者が特定の目的で町会の運営を握り、安易に若者を受け入れないこともあります。そういったところでは力づくでも若者に運営に関わってもらいたいと思います。楽しいですよ。



[外国人への情報発信不足] 2011年、東日本大震災で大きな課題を見出しました。この緊急事態に対し、政府、行政、大使館から、十分かつ多言語による情報はなく、また情報に透明性はなく、我が団地からは、約四割の外国人が母国に避難しました。地方に住むインド人にまで情報を発信することが難しく、インド関連の諸団体のリーダーたちと、日本全国で福祉活動が出来るような組織の形成を考え始め、それが「全日本インド人協会(AJAI)」の発足へと繋がったのです。当時は地震の揺れでガス栓が自動的に閉まってしまい、人びとはその再開方法すら知りませんでした。このことを教訓に団地内に英語の掲示物を増やし、災害キットの準備、防災訓練への参加、お互いへの協力などを、外国人に促すことにしました。私は、国はもはや、全国規模の多言語災害対策サイトを構築すべきと考えます。パソコンまたはスマホの画面で、日本の地図の任意の場所をクリックすると、リアルタイムで災害情報が分かるようなものです。家族が離れて住んでいる場合でも役立つサイトになると思います。

[外国人児童の教育問題] 大地震直後には、東北の亘理町、気仙沼にボランティア



に行き、地元で募金活動などをしました。不思議とインドに帰る気にならず、ボランティアを通じて「日本の一員」になったという想いが強くなり、帰化する決心をしました。インド人学校に通学していた息子も日本の学校に転校し、公立小学校に2年間、公立中学校に1年半通いました。私はPTAの学年長、副会長など学校の活動に積極的に参加しました。毎日のように朝の挨拶活動をしました。ところが、息子が中学校で先生による酷いいじめを受け、かなり悩んだ末、息子の海外への留学を決めました。息子は奨学金を得てイギリスに留学、現在20才で、ノッティンガム大学で経営学を学んでいます。日本の公立小中学校でのいじめと虐待が撲滅され、多様性が認められ、一人ひとりが生き生きとする教育が必要だと感じました。そのためにも多言語、グローバル教育、思いやりと哲学の教育を導入すべきと考えます。一方、国内のインターナショナルスクールに通う子どもの場合は日本語が上達せず、地元の友達が少ない、国内大学への進学は難しいなど、また別の課題が山積しています。インターナショナルスクールに通う多くの子どもは海外の大学に進学してしまい、**頭脳逆流出**という現象が発生しています。国内の外国人が増えるなら、教育の在り方についてそれなりに考えていく必要があります。

[日本での起業とインド情報発信] 2012年、来日している母親が発熱した際、近所の飲食店で買えるインド料理には家庭料理が一切なく困った経験をしました。それを機に西葛西(移転して今は葛西)で日本初の**印度家庭料理店レカ**を開店しました。母レカが厨房に立ち、我が家と全く同じ料理を提供したところ、全国的に話題の店となり、江戸川区長賞も頂き繁盛店となりました。必死に働き、やっと掴めた成功でした。この店を通じてインドに関する正しい情報の発信を始め、2016年に葛西の町で



江戸川印度文化センターを設立しました。このセンターでヨガ、言語、歴史、音楽などの勉強会やライブを開催し、全国の中高生、大学生、研究者へのレクチャーも行っています。日本で起業を希望する外国人に向け、手続きの簡素化、多言語化、銀行等の手続きの透明化を推進すべきと考えます。

[外国人と日本人の真の交流] 近年の政策変更により、在日外国人数が年々急増しています。茨城県では農

家の3人に1人が外国人です。この人たちは良い就職、良い生活を求めて日本にきています。でも、日本語や日本のマナーを熟知していません。また、行政、警察や一般の日本人にとっても「外国人」が一括りになっていることが多く、外国人も国や地域によって様々な違いを持っていることを理解されていません。外国人一人ひとりの文化的背景が違ふ、それは年に一度の文化祭程度で理解することは出来ません。外国人と日本人の両方に対し教育・研修の機会、常に交流が出来る機会を作っていかなければなりません。このためには個人、町会、行政の努力、つまり自助・共助・公助が必要であると考えます。また、偽造書類などを使い不当に入国する、入国させる悪い人たちも中にはいます。その悪い人たちのせいで全ての「外国人」が悪く見えることもあり、入管、警察などでの外国人への不当な扱いの事案はいくらでも耳にします。このようなことを改善すべく、正しいルール作りと思いやりの対応を求めていきたいと思っています。

[リトルインド計画への反対と政治家への道]

2017年ごろ、私が住んでいる地域で「リトルインド」を作る話が出ました。私は世界各地のリトルインドに何度も行ったことがあります。その時感じたのは、結果的にこれらが分断社会、偏見社会を作ってしまうということです。一番気になるのは、これらのリトルインドではインド人のビジネスマンが少ないことです。低所得、低学歴の者が多く集まり、経済、教育などの観点から遅れた地域になっていきます。ゴミのマナーなどは守られず、徐々に行政からも無視されるようになり、インフラ整備や掃除などが遅れていきます。自分の経験からも、このリトルインド計画に対し、住民へのアンケートによる方針改善を提案したのですが、受け入れてもらえませんでした。そこで、計画そのものに反対することにしたのです。区長、地域係に陳情書を提出し、面会して反対の理由を説明し、地域の住民に訴えました。この行動を通じて、外国人は何を考えているのか、何を求めているのか、分断した社会を避け、何をしたら外国人と日本人の共存だけでなく共生が可能になるのか、自ら行政に伝えたいと思いはじめ、政治への道を選び、2019年の4月に

区議会議員に立候補し、当選を果たしました。

[都議選での敗戦と教育者への道]

2021年4月、所属する政党から同年7月に行われる都議会議員選挙への公認を受けました。話し合いの末、立候補することにしました。準備にはあまり時間がなく、また他の候補者は数カ月前から宣伝活動をしていたので、容易な選挙ではないと分かっていました。チームを構築し、チラシ、パンフレット、選挙カーなど短期間で様々な準備を進め、約1ヶ月半の活動ができましたが、当選には至りませんでした。20,000余りの票を頂き、次々点となりました。私はこれからのことを考えるために「哲学の旅」に出ました。最初は九州の方に出かけましたが、インドで開催される全国大学生議会へのスピーカーとして招待され、インドに呼ばれている気がして、インドへ行きました。50日間の旅をしました。色々考えるきっかけとなりました。

[教育者への道] 旅の最中に茨城県が県立中高一貫校において民間校長を募集しているとの情報が入りました。校長なんてないでしょうと否定的でしたが、募集要件はかなり私の経験に近いものでした。恐る恐る応募しました。エッセイなどを書いて、そこから3回の面接を受けました。最後の面接は県知事とでした。県知事の明確な考えに希望を乗せて、民間校長のオファーを承諾しました。2022年4月1日に副校長に就任し、2023年4月には校長に就任予定です。自己診断、自己肯定感、国際感覚、多言語能力などをキーワードにアイデアを出していこうと思います。私の夢は日本で公立国際小中高校を開設することです。生徒は日本人と外国人が半分ずつで、多言語で学ぶ学校です。例えば5万円程度の学費を頂いて運用することで財政への負担もかからないと思います。この学校に通う子どもは自然に国際感覚を育み、自ら多文化共生を進め、世界を制覇すると思います。

[ボディー、マインドとソール] 私は、ボディー・マインド・ソールの三つの要素のバランスを大切にしています。ヘルシーなご飯や体操などを通じて健康な体を作り、学習や読書などを通じて知識を集め、哲学の勉強やボランティア活動などを通じて精神をフリーにすることを目指しています。この3つの要素に優先順位はなく、そのバランスが大切であると思いますが、今の世の中は思いやり、助け合い、譲り合いが一番必要で、それこそが人類の、地球の、宇宙の平和につながると思います。みんなで、平等で平和な世の中を目指そう！



2023 年度版 好評発売中!!

母親が歩いて見た

帰国生のための学校案内

首都圏版 中学・高校編

価格 国内:3,740 円(税・送料込)

海外:3,400 円(送料別)



1 確かな情報



学校から直接いただいた情報を掲載。帰国生入試の詳細、入学後の配慮、学校選びや受験勉強のポイント、入試時の様子など、学校のホームページや説明会では得られない情報をお届けします。

2 訪問してわかる学校の素顔



先生や帰国生からお話を伺うと学校のカラーや雰囲気がよくわかり、訪問前に抱いていた印象と異なることもあります。学校に足を運ぶことが難しい海外在住の方にも感じ取っていただけるよう、記事を書いています。

3 Simple, Honest & Fair



フレンズスタッフの体験から、本当に欲しくて必要な情報を各校同じ形式で平等に掲載しています。帰国生の受け入れ態勢を重視し、偏差値では計れない学校の状況をお知らせします。

4 編入学実施校が見つかる



フレンズスタッフが突然の帰任に際し、一番苦労したことは編入試験を実施している学校を探すことでした。編入受け入れの有無、試験の形態、最終受け入れ時期を全校掲載しています。

Amazonをはじめ、フレンズ HP からもご購入可能です。



帰国生 学校案内

検索

5 さまざまな情報



各都県の各種相談窓口や寮のある学校一覧、またフレンズスタッフがお伝えしたい留意点なども記載。『受験体験記』では「受験校に至るまで」「入試の様子」「入学、その後」を保護者の視点からお伝えします。

お知らせ

フレンズと一緒に活動して下さるスタッフ募集中！無理なく楽しく、をモットーに、各自希望の曜日に週1回、銀座のオフィスで活動しています。コロナ禍でオンライン化が進み、在宅での作業も可能になりました。海外生活の経験を生かしてみませんか？

ご興味ある方は以下連絡先にいつでもお気軽にお問い合わせください。

編集後記

フレンズは来年、40周年を迎えます。その間、外国への移動ははるかに手軽になり、通信技術も発達。国際通話はタダ同然、情報もネットで手軽に入手できるようになり、海外はグッと近くに感じられるようになりました。そんな今でも、我々だからこそ提供できる話題や情報があると信じ、今後も帰国生とその家族に寄り添った紙面作りを心がけていきます。

発行/フレンズ 帰国生 母の会

〒104-0061 東京都中央区銀座 5-3-16 日動火災・熊本県共同ビル 8階

TEL 03 (6633) 4096 FAX 03 (3573) 1217 Email:fkikoku@gaea.ocn.ne.jp